

年頭法話

昭和五十八年太岁癸亥正月一日

白寿

日達

新年の御慶び芽出度申納めます。

凡そ生命有る者の中に於て受け難くして人間に生れました。人間には生死無常の憂が有りますが、その中に於て幸に白寿の長命を持つ事が出来ました。

白寿の長命の間にも少病小憇氣力安樂に過ぎず事が出来ました。毎日世界各地を周旋往返して倦む所がありませぬ。

又会ひ難きは仏法と聞きました。然るに仏法流布の國に生れて、生れ乍らにして仏法に逢ひ奉りました。同じ仏法の中にも法華經の題目に逢ひ奉り、結句題目の行者となりました。仏滅後末法惡世に生れて法華經の行者となることは、過去世に十万億の諸仏に親近し供養せる菩薩行の功德に由るものと法華經に説かれてあります。日蓮大聖人は此經文を見給ひて、法華經の行者となる自己の果報をどんなにか喜ばれた事でしょう。

— 4 —

私は信心浅くして我宿世の功德を、き程喜ぶ事は出来ませぬけれども、法華經の行者として、我一生を反省する時、終始一貫して喜びに堪えざる者があります。

出家の身となつて、自由自在の一生を得ました。上に君長の權威も無く、下に臣民の隸屬も有りません。生活の問題も無く、老若の間隔も無く、親疎の差別の問題も無く、五塵六欲の誘惑にも執着せず、我が欲する処に往き、我欲する処に止まりました。行く所には足跡を残しました。止まる処には宝塔を立てました。風のまにまに吹き廻される白雲のような一生であります。出家の中にも海外伝導であります。海外伝導の中にも西天開教であります。西天開教の中にも印度の仏教復興であります。印度の仏教復興は、既に根を下し枝葉をつけ花咲き実らんとして居ります。一闇浮提の中にもアジア諸国、アジア諸国の中にも日本国の仏法が印度に流布して、印度に仏法を復興せしめました。

— 5 —

印度に日本の仏法が流布したと云う事は、但だ日本人が印度に宝塔を立てたとか、寺院を立てたと云う事では無く、印度の人々が、南無妙法蓮華經と唱うると云う事であります。

「月は西より東に向へり、月氏の仏法、東へ流る可き相なり。日は東より西へ入る、日本の仏法、月氏へ帰る可き瑞相也。」

謙勝八幡舎に予言せられし日蓮大聖人の未来記は、大聖人御入滅後七百年にして、正に適中致しました。

た。世にも比類なき壯觀であります。

諫暁八幡鈔に云く、「月は光り明かならず、在世は但八年也。日は光明、月に勝れり。後五百歳、長き闇を照らすべき瑞相也。」

四条金吾殿御返事に云はく、

「今は時既に後五百歳、末法の始めなり。日には五月十五日、月には八月十五夜に似たり。天台・伝教は、先に生れ給へり。今より後は又後悔なり。大陣已に破れぬ、余党は物の数ならず。今こそ仏の記し置き給ひし、後五百歳末法の初め、況滅度後の時に当りて候へば、仏語虚しからずば、一闇浮提の内に、定めて聖人出現して候らん。聖人の出づる驗には、一闇浮提第一の合戦起るべしと説かれて候に、既に聖人や、一闇浮提の内に出でさせ給ひて候らん。」

- 6 -

西天開教と云へば、宗教的宗派的色彩であります。印度独立と云へば政治的色彩であります。西天開教が印度独立と一体化する処が、是則日蓮大聖人の宗旨たる立正安國であります。立正安國論に、「汝早く信仰の寸心を改めて、速に実乗の一善に帰せよ。然らば則ち三界は皆仏国也、仏国其れ衰へんや。」とはガンジー翁が英國の執政官に対して諫めし言葉と同意義であります。印度の独立より外に西天開教は有りませぬ。もし有りと云へば、それは商買、宗教の職業であります。日本山の西天開教とは、印度の独立運動がありました。

さて西天開教が一往達成した処で、其後はどうなるでしょうか。

諫暁八幡鈔に、「日は光明、月に勝れり。後五百歳の、長き闇を照らすべき瑞相也。」と仰せられました。

四条金吾殿御返事に、「今は時既に後五百歳、末法の始めなり。日には五月十五日、月には八月十五夜に似たり。天台・伝教は、先に生れ給へり。今より後は又後悔なり。大陣已に破れぬ、余党は物の数ならず。」と仰せられました。

- 7 -

「後五百歳の長き闇」とは、法華經勸持品に數々説かれたる、地湧の菩薩が出現して、法華經の肝心・南無妙法蓮華經の七字を、一闇浮提に広宣流布せしむる時であります。法華經の勸持品に曰く、「仏滅度の後恐怖惡世の中に於て、我等當に廣く説くべし。」と法華經の広まる時代の相を、恐怖惡世と定められました。妙法蓮華經如來壽量品には、「衆生劫尽きて、大火に燒かるると見る時」と説かれました。

日蓮大聖人の立正安國論に曰く、

「藥師經の七難の内五難忽に起り、二難猶残れり。所以佗國侵逼の難、自界叛逆の難也。大集經の二災の内二災早く顯れ、一災未だ起らず、所以兵事の災也。」云々。

凡そ生存する一切衆生を絶滅せしむる恐怖は、則戰爭兵火であります。戰爭兵火を起す者の大集團が

国家組織であります。軍事同盟であります。是を、「悪世」と呼ばれます。自ら意識する者、軍隊・政府・科学者・技術者・労働者・死の商人、意識せざる者一般市民を巻込んで俱に戦争兵火を作ります。是を「長き闇」と申されました。後五百歳の長き闇を照らす可き光明が、則日本仏法であります。其岩戸開きが西天開教であり、印度の独立ありました。非暴力の活動であり、但行礼拝の修行であります。

四条金吾殿御返事に云く、

「今こそ私の記し置き給ひし後五百歳末法の初め況滅度後の時に當て候へば、仏語虚しからずば一闇浮提の内に定めて聖人出現して候らん。聖人の出る験には、一闇浮提第一の合戦起るべしと説かれて候に、已に合戦も起りて候に、既に聖人や一闇浮提の内に出でさせ給ひて候らん。乃至。

- 8 -

日蓮が心は全く如来の使には非ず、凡夫なる故也。但し三類の大怨敵に怨まれて、一度の流難に值へば、如来の御使に似たり。心は三毒ふかく一身凡夫にて候へども、口に南無妙法蓮華経と申せば如来の使に似たり。」

釈迦牟尼世尊は、仏滅後五百歳末法の初めに起る闇浮提第一の戦争兵火を鎮め、一切衆生の寿命を永遠に護らんが為に、

「是の好き良薬を今留めて此に在く。汝等取て服すべし。差えじと憂ふる事勿れ。」と説かれ、是の

- 9 -

好き良薬を衆生に服用せしめんが為に、使を遣して還つて告げられました。漢土の天台、日本の伝教は、能く法華経を弘通せられたけれども、末法の時代よりも早く生れて、是の如来の御使とはならなかつた。末法に生れる如来の使とは、「一身凡夫にて候へども、口に南無妙法蓮華経と申せば如来の使に似たり。」と定められました。

近年歐州各国、北米方面に勃発せる「核兵器反対、戦争反対、軍備反対の世界的普遍の大行進、大集会、大運動は、何れも皆悉く非暴力運動であり、但行礼拝の運動であります。更に是をこまかに見れば、何れも皆擊鼓宣命の叫びであります。宝塔湧現の大工事であります。

- 9 -

歐羅巴開教は立おくれて近年になつて漸く着手致しました。宝塔湧現は、英國を始めオーストリアの首都ウィーン、フィンランドの首都ヘルシンキ、ギリシャのアテネ、東ドイツのドレスデン、西ドイツのベルリン、フランスのヴェルダン、イタリーのベニス等、筈が芽を出すように発願され、着工されつつあります。古来仏教の弘まらなかつた歐州諸国に、仏教の本尊—教主釈尊の御遺骨を祀る宝塔がかくの如く歓迎され、供養されることは、まことに不思議の限りであります。仏滅後五百歳末法の初め法華経が広宣流布すると云う金言の合う所以であります。古来仏教國のアジア諸國に於てさへも、近年宝塔湧現は稀に有る仏事に過ぎませぬ。

北米合衆國の開教は已に二十年已前になります。いかに宝塔建立を誓願しても、なかなか宝塔は立ち

ませぬ。サンフランシスコは其第一号であり、ロサンゼルスは其第二号であり、シャトルは其第三号であります。人類全滅の凶器たる原子爆弾・核兵器を開発せる国、核兵器を戦争に採用して市民を全滅せしめたる国、人類全滅の核兵器戦争の準備に狂へる国、北米合衆国が最も恐れて居る物は平和であり、世界平和であります。

世界平和を創造せんとする宗教の本尊—釈迦牟尼世尊の遺身舍利を祀る宝塔の建立を承認することは有り得ないでしょう。併ら日本の仏法は必ず宝塔を建立する。五五百歳末法の初め恐怖悪世の一切衆生を救い護らせ給ふ、教主釈尊の秘密神通の力を信するが故であります。其一例として、シャトルのトライデントミサイル原潜基地正門前に、平和塔建立の裁判を挙げましょう。一九八一年十一月二十九日、キサップ郡委員会の工事中止命令に対する抗議はキング郡より起きました。それは郡委員会が異議申立人である場合には、隣接郡委員会がその裁判を傍聴する事が出来ると云う州法規に基いた所以であります。

キング郡高等裁判所判事フランク・サリバン判事は、昨日(二十九日)非暴力運動のグランドゼロ、セントラルに於ける、測地学的ドーム寺院の建設を中止させたのは、キサップ郡委員会の誤りであったと裁定しました。又キサップ郡委員会は、此建設を制止させる何等の権利も持た無いと語りました。

申渡し

「キサップ郡役所は、最初の公聴会に於ける『御仏舍利塔の建立は許可すべし』と云う審査官の報告を無視して、自分勝手に反対に建立工事中止命令を出しました。中止命令の理由は何も見出されませぬ。」云々

判事の申渡しがすむと、傍聴して居つた三十人程の平和運動者等は互に手をとり合い涙を流して喜びました。

此の外、宗教的、宗派的対立の障壁が、佛教の宝塔建立の邪魔になる恐れが有ります。特に耶穌教國の歐米に於ては、仏教徒は一人もおりませぬ。仏教寺院も一軒もありませぬ。さればサンフランシスコもロサンゼルスも未だに宝塔が建ちませぬ。然るに高祖日蓮大聖人第七百遠忌を記念して世界平和大行進を行つて已來、突然世界の気風が一変して、宝塔建立歓迎、擊鼓宣令賛成となりました。就中、北米のロサンゼルスに於ては、カトリックの大教会が、日本山の為に大集会を開き、其婦人会が所有するところの十エーカーの土地を、日本山の宝塔建立の宝土として提供しようと申出ました。其婦人会員が、去るの十二月、日本山の御寺に於て臘八摂心断食修行に参加しました。日本の仏法は、風の空中に於て一切障碍無きが如く、ヨーロッパ各国、北米各地に広宣流布して居ります。妙法蓮華經如来神力品の偶の文は、宛も符契の如く此事実に符合しました。

以上は日本山の話であります、今別に一例をアメリカに引きませしょう。

米国に於ける軍事行動、外交政治面についていく事が多かったヤン教、カトリック教会の全アメリカの司教達が、ワシントンで十一月中旬集会を開きました。その草案を討議しました。此草案は、核兵器を都市攻撃、町の攻撃に使用する事は不道徳である、と批難し、核兵器をもつて先に使用する者に反対するという。核兵器抑止論、核の傘に入る、これには強い疑問がある。次に歐州ヨーロッパ大陸間弾道弾MXの導入にも抵抗する、こういう事を決議します。そこでレーガン政権が反対せる核凍結運動も、此の会議は支持する等と、現代キリスト教会史上に於て画期的な行動をとりました。此の司教會議中にレーガン政権は、クラーク大統領補佐官が署名した長い手紙を書いて、その決議に反対するという政府の立場を説明しまして、集まつて来た一百八十五人の司教全員一人一人に配布しました。然るにその決議草案に反対して、政府の見解に従ふ司教は、僅に六名の司教であります。他の一百七十九名の司教は、核兵器反対の決議草案に賛成しました。

此決議草案が、今年の五月シカゴで開かれる次の司教會議で採択された暁には、是決議が全米五千万のカトリック信者の日常生活の指針となります。此決議草案は、国家と其理想に対して忠誠を守り度いと願うけれども、教会が決定した平和と云う普遍的な法則は守らなければならない、と宗教的良心の優位を説いて居ります。ここに恐る可き力があります。日本国に於ては、核兵器反対運動は三十余年以前から、毎年大会を開き大行進を企てて居りますが、その日本の核兵器反対運動には、宗教的良心の優

- 12 -

- 13 -

位が強調されておらないのみならず、稍もすれば党派的色彩が現はれまして、全国的大運動となることを妨げてきました。

此決議草案は、核兵器生産に携はる者は其職を離れねばならぬ。政府や軍関係の人に対しては、個人の良心を尊重す可しと訴えて居ります。

此決議草案は、過去二ヶ月間検討され練成されたものであります。過去一年以前の春、我日本國の東京に於て、「世界宗教者平和會議」を開催して、「核兵器反対、戦争反対、軍備反対」の決議を満場一致で採択致しました。日本の政府は此の会議を、「好ましからぬ集会」として外国に紹介しました。今日アメリカのレーガン政権の、アメリカの司教會議に対する反対の立場と似て居ります。ホワイトハウスも、政治的影響の大きいなるにショックを受けずに居られません。

此外アメリカ原住民インディアンの反抗、黒人アフリカ民族の非暴力的反対運動が一体化して、アメリカの軍事政策を変革せんとしつつあります。

日蓮大聖人の、「大陣已に破れぬ。余党は物の数ならず」と仰せられし御言葉は、今や日本の仏法、我身の上の未来記となり、アメリカ世界の平和政策転換のきさとなりました。

年頭の御辭としてお芽出度い話を致しました。

御祖師様の御人滅より一、三年前の、「春の初の御消息が今残っております。私はお正月に太平楽を

語つて居りますが、高祖日蓮大聖人様の晩年、身延山に於ける御正月の御慶の御消息を拝見致しました。

南無妙法蓮華經

春初御消息

「春の初めの御悦び、木に花の咲くが如く、山に草の生ひ出づるが如じと、我も人も悦び入つて候。さては御送物の日記、八木一俵、白塩一俵、十字三十枚、芋一俵、給び候ひ畢んぬ。深山の中に、白雪三日の間に、庭は一丈に積もり、谷は峯となり、峯は天に梯かけたり。鳥鹿は庵室に入り、樵牧は山にさし入らず。衣は薄し、食は絶えたり。夜は寒苦鳥に異ならず。星は里へ出でんと思ふ心ひまなし。既に読経の声も絶え、觀念の心も薄し。今生退転して、未来三五を経ん事を嘆き候ひつるところに、此の御訪問に命活きて、又もや見参に入り候はんすらんと嬉しく候」云々

人も通はぬ深山の中、降り積る雪に閉ぢ込められたる高祖大聖人様、衣は薄し食は絶えたり、と記されました。重ね着する着物が有りませぬ。「食は絶えたり」幾日かの御断食に、最早法華經誦詠の声も出なくなる、それ迄に疲れはてられました。仏法の深い道理を辿る觀念體法の心も薄くなつて、雪中には但だ餓死凍死する夕を待つ計りとなられました。星はいつそ人里へ出やうかと、そんな事計り想ひ続け

られました。夜は寒さに堪えきらず、ここに死んではいけないから、夜が明けたならば何とか温まる工夫をせねばならぬとつくづく想はれました。寒さ、ひもじさの苦しみに夜も星も悩まされ続けて、臨終するならば、来世の成仏も覚束なく、又もや六道輪廻の苦界に沈むであろう、と自ら嘆いたと仰せられました。

末法五濁乱漫の時代に、いやしくも法華經を弘傳せんとする御弟子・檀那の為に、尊い御身を以て、かかる寒さひもじさの極限に命をさらされました。私は其御弟子として、此盛大なる新年の祝宴に待つております。寒いよりも厚い着物を重ねております。これで胃が当らなくてすむでしょうか。

昭和五十八年太宰癸亥正月一日

日蓮

南無妙法蓮華經